

OECD 教育研究革新センター編著 立田慶裕監訳「学習の本質—研究の活用から実践へ」明石書店 2013年3月27日刊を読む

＜動機づけの8つの主要原則＞

生徒が学習に取り組むよう強く動機づけられるのは、次のような場合である。

- (1)期待されていることをやりきる十分な能力があると感じているとき。
- (2)行動と達成の間に安定した関連があると認識するとき。
- (3)教科に価値を見出し、明確な目的意識を持つとき。
- (4)学習活動に肯定的な感情を経験するとき、学習への取り組みがより強く動機づけられる。
- (5)学習活動に否定的な感情を経験するとき、学習から関心をそらす。
- (6)感情の強さ、長さ、そしてその表出に影響を与えることができるとき、学習に対する認知的リソースを自在に扱うようになる。
- (7)リソースを使いこなし障壁にうまく対処することができるとき、学習にがんばって取り組むようになる。
- (8)環境が学習に望ましいと認識するとき、動機規律方略を用い、学習に取り組もうと、より強く動機づけられる。

1. (1)「動機」は、意味のある知識やスキルの習得を生徒に保証する。
- (2)感動のように、学習課題の取り組みに向かわせる積極的な動機の存在は、生徒を学習に熱心に取り組めるようにする。
- (3)生徒が動機づけの仕組みに気づき、動機が学習にどのように影響するかを知るよう助ければ、生徒はさらに優れた学習者になる。
- (4)教師は、生徒の進歩をそばで見続けて、生徒がいつも新しいことをできるようにする必要がある。
- (5)教師の期待が生徒の成果に重要な影響を及ぼすので、教師の期待は前向きでありながらもなお生徒の現実に即したものでなければならない。
- (6)生徒が用いた学習方略やその学習成果をどう感じたかを振り返るためにも、教師は生徒に振り返りのための時間や場所、サポートを提供する必要がある。
- (7)生徒の経験がネガティブなものの場合、そのネガティブな経験がもたらす動機づけへのシ

ョックを補うために、十分な成功体験を提供する必要があるかもしれない。

(8)さらに一般的に、学習環境は、生徒の個人的な関心や内在的な動機が明確に理解され、育てられることをねらいとする必要がある。

2. (1)感情は、教師にとって診断的価値を持つ。

(2)というのも、感情は、その人が知っていること(認知)、取り組んでいること(関わり)、興味を持っていること(関心)に基づいて現れるからである。

(3)教師は、生徒たちの動機に関する考え方について自覚的である必要があるし、かれらの感情に敏感である必要もある。

(4)そのような情報が、生徒の学習プロセスの設計に役立つからである。

(5)教師自身の行動やその教授活動、そして評価の実践は、生徒の特定の感情や動機づけを引き出す。

(6)逆に、生徒の感情は、そこで生じる学習の質に影響する。

(7)幸いにも、感情の調節によって、否定的な反応を減らすこともできるし、感情規律方略といった対処的方法(コーピング)をとることもできる。

(8)そこに関わる方略は、再評価を含み、もっと肯定的な方法で状況を再構築するものであり、個人の問題としてではなく、(脱個人化)、あまりに個人的な挫折を生む結果をもたらすものでもなく、むしろ自分に対して客観的であるように学習者を促すのである。

3. (1)「感情」は、学習の重要な守り人(gatekeeper)である。

(2)感情と認知は、学習を導き、脳の中で途切れなく働いている。肯定的な感情は、たとえば長期的な想起をもたらすし、否定的な感情は、脳内の学習プロセスを妨げ、時には学習が行われた後も生徒に学習の内容をまったくあるいはほとんど思い出させないようにしてしまう。

(3)このことは、教授と学習にとって重要な意味を持つ。

(4)否定的な感情の状態は、生徒が学習環境にもたらす外部環境や教室環境の結果でもある。

(5)学習機関が学習者の感情やその発達に関わるべきかどうかの議論は的外れであり、学習機関が認知的な発達に責任を負うのであれば、同様に感情の発達についても責任が求められる。

P393 ~ 395

<コメント>

先生方にとって学習指導で最も重要な課題である「動機づけ」についての OECD の知見の集大成が、この「動機づけの 8 つの主要原則」。「学習の本質」を見極め、OECD の研究成果をどう日々の「実践へ」生かすかが、「職業としての先生」の使命といえる。頑張りましょう。

2020年11月5日(木)